

現代インド・ムスリムの平和共存思想

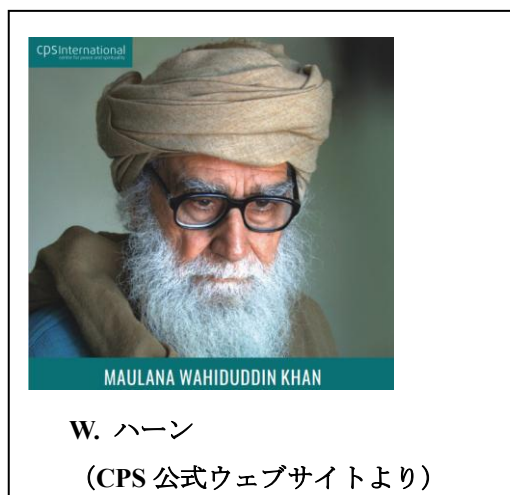
—ワヒドゥッディーン・ハーンと平和精神性センターの言説—

明治学院大学 大川玲子

序論

本稿の目的は、ワヒドゥッディーン・ハーン (Wahiduddin Khan, 1925–2021) が創成した平和精神性センター (Centre for Peace and Spirituality、以下 CPS) の二つの機関紙の変遷をたどりつつ、その言説の根幹とダイナミズムを解析することにある。

ハーンは北インド出身 (1925 年生まれ) のイスラーム思想家で、ニューデリーを拠点にする CPS の活動を率いてきた。10 代でイスラーム神学の学習を始め、マドラスで学んだ後、改革派のデーオバンド派思想にもふれた。しかし基本的に独学で幅広く読書を重ね、特に科学や西洋近代思想を学び、独自の思想を展開した。1970 年代に執筆活動でムスリムの意識を改革しようとして『アル・リサーラ』誌を発刊、イスラームの平和的解釈や対話重視の思想をインド国内外に広め続けた。2001 年には CPS を創設、宗教間の暴力や対立を厳しく批判し、インドの多宗教社会における共存のための活動に邁進した。2021 年 4 月に新型コロナウイルス感染症のため 96 歳で他界している。



本稿の分析対象は、CPS の二つの機関紙 *Al-Risala* (英語版, 1984–2012、以下 *AR*) と *Spirit of Islam* (2013–、以下 *SoI*) である。ハーンは月刊誌 *AR* のウルドゥー語版を 1976 年に、英語版を 1984 年に創刊した。(本稿では英語版のみをとりあげるため、分析対象に制限があることを明記しておきたい。) ハーンは思想家かつ活動家であるが、行動主義的な政治運動ではなく、内面改革と学習を軸とする活動方針を一貫してとってきた。つまり機関誌を通して発するメッセージを通して読者の内面を変革

させることが彼にとって最重要活動であったと考えられる。

本稿では CPS によるこれらの機関紙の編集と言説の核を三つの時期に分けて検討する。第一期が *AR* 期、第二期が 2013 年に *SoI* に移行した後、そして第三期が 2021 年のハーン逝去後から今に至る時期である。このなかでインドにおけるヒンドゥー教徒とムスリム間のいわゆるコミューナル暴動（宗教集団間暴動）であるアヨーディヤー事件（1992 年）やグジャラート事件（2002）にハーンと CPS がどう向き合ってきたのかについても具体的にふれていきたい。また筆者が 2024 年 8 月に行った CPS スタッフへのインタビューも適宜交えていく。この分析を通して、機関紙は発展しながらも、一貫したメッセージを反復しムスリムに平和的共存の叡智を伝えてきたことが明らかになるだろう。

ハーンに関する先行研究は、これまで主に Irfan Omar によって蓄積されてきた。Omar はハーンを非政治的パシフィズムとして論じてきた（Omar 2006, 2008a, 2008b）。また Omar 以外の研究者によってもハーンは多角的に分析されている。Troll は、ハーンを近代インドにおけるイスラームの新しい声として位置づけ、非暴力・寛容・普遍主義に基づく実践を評価している（Troll 2002）。さらに Sikand はインド独立後の重要なムスリム思想家として対話から平和的共存を追求したハーンを評価し（Sikand 2004）、Okawa はハーンのクルアーン解釈から平和共存思想を抽出して分析した（Okawa 2019）。加えて Woerner-Powell によるイスラームにおける平和主義と非暴力思想に関する研究においてもハーンは内面と日常生活での実践を重視した非政治的平和主義思想家として位置づけられている（Woerner-Powell 2025: 136–172）。

この研究史をふまえて本稿は、機関紙に焦点をあて、その歴史的展開を解明することを目的とする。そうすることでハーンと CPS の言説が危機的な出来事にどう向き合い、どのようなメッセージを発出してきたのかというダイナミズムを把握したい。そしてこのメッセージから異文化共存、特にマイノリティとして共存するための普遍的叡智を学ぶことができるのではないかと考えている。

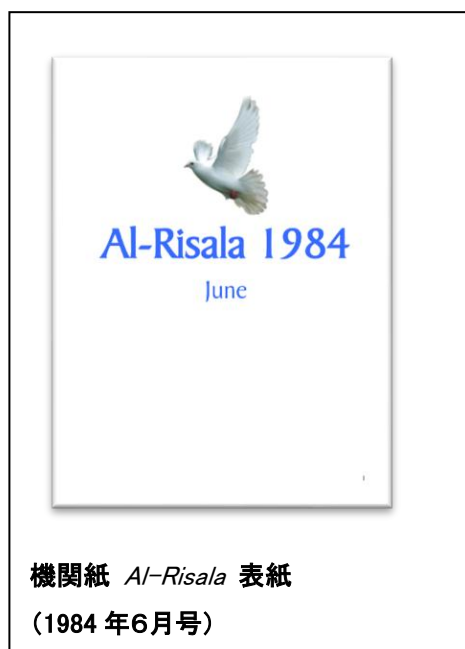
第1章 *Al-Risala* 期

（1）編集方針と読者像

英語版 *AR* の構成は、巻頭の小論に始まり、1–3 頁ほどの神学エッセイ、Q&A、格言、読者書簡とリズム感のある読みやすいものである。長い論文ではなく、短く印象的な格言・命題を多く含む文章であるため、読者が日常生活のなかで保持し実践に移しやすい規範を提供できている。この編集方針によって、*AR* はハーンの提示する宗教思想の制度化の基盤として機能してきたと考えられる。

ここで具体例として 1984 年 2 月号を概観してみたい。クルアーンの引用の後、「悲劇的生活の幸せな結末」、「注意して、誰かが聞いているかもしれない」「唯一

神への信仰」「不統一こそが敵の武器」「宗教と科学的推論」「非暴力こそが最強の武器」といったタイトルが並んでいる。このように各論考は1-3頁程度で読みやすく、読者が無理なく理解することが可能となっている。



また格言が反復されるため、読者の記憶に定着しやすい。格言は例えば「イスラームにおいて平和こそが規範 (peace in Islam is the rule) (AR 2002 May/June: 2-3) や「現実主義こそが平和への鍵 (Realism is the Key to Peace)」 (AR 1997 July/August: 5-6)、「邪悪な勢力とは愛でもって戦え (Fight the Forces of Evil with Love)」 (AR 1999 Jul/Aug: 18) といったインパクトのある言葉となっている。一般読者に分かりやすくハーンの思想を伝えるという意図が効果的に編集作業に落とし込まれていると言えるだろう。

(2) 中心的なメッセージとしての「非反応」

ARでハーンが繰り返し説く中心的主張は平和的共存のための「非反応／非対抗」で、これは挑発に反応しないことを意味する。

逆境にいる場合、反対勢力を排除する手段として、しばしば正面からの対決に訴えられることがあります。ですがそのような否定的な反応は、ほとんどの場合、逆効果となります。経験から分かるのは、多くの場合より良い方法は前向きな行動をとることだということです。つまり、「悪に対して善をもって応える(to return good for evil)」ことです。・・・連鎖反応には終わりがあろうには見えません。(AR 1999 Jul/Aug: 18)

さらにハーンは、一般的には暴力的「聖戦」ととらえられがちなジハード概念も再解釈する。クルアーン 25章 52節「これ(クルアーン)でもって奮闘努力しなさい」を引用し、ジハードは内的・精神的なつまり非暴力の奮闘努力だとする。これに対してクルアーンで用いられる「キタール(戦闘)」という言葉为例外的な防衛のための武力をとらえて、ジハードと峻別する。こうすることで暴力行為は推奨される行為ではなく、やむを得ない場合の例外的手段として強く制限されることになるため、ハーンの「非反応」の思想を補強することが可能となっている (AR 2002 May/June: 2-7)。

(3) アヨーディヤー事件 (1992 年) への応答

アヨーディヤー事件とは 1992 年にヒンドゥー民族主義者がインド北部のアヨーディヤーにあるモスクを破壊したことをきっかけに、インド各地にヒンドゥー教徒とムスリムの間で広まった暴力行為（コミューナル暴動）のことである。ムスリムを中心に数千人の死者が出たとされ、インド独立後最大規模の宗教対立による暴動となった。アヨーディヤーはヒンドゥー教徒にとっては『ラーマヤナ』の主人公ラーマ王子の故郷である。ムガル朝の初代皇帝バーブルが、ラーマ神像のあるヒンドゥー寺院を壊してバーブリー・モスクを建てたため、このモスクの帰属が現在に至るまで宗教間の対立の場となってきた。

このヒンドゥー教徒とムスリムの対立、特に大きな被害を受けたムスリムたちに対して *AR* はこの事件の責任を政治化する方向には向かっていない。

バーブリー・モスクの物質的崩壊は、ヒンドゥー過激主義の道徳的崩壊を象徴するものとなった。神の御心によって、この冷酷な破壊を契機に、国の中に新たな意識が呼び覚まされるだろう。少なくとも次の数世代においては、このような醜い事件が繰り返されないことを願おう (*AR* 1992 December: 2)。

また 1993 年 1-2 月号では、アヨーディヤー問題についての記事「アヨーディヤー事件の唯一の解決策」が掲載されているが、ヒンドゥー教徒を批判する明示的言説は見られない。むしろ、紛争そのものがインドの歴史を否定するものであること、また解決のためにはムスリムもヒンドゥー教徒もそれぞれが譲り合う必要があることが示唆されている (*AR* 1993 January/February: 7-8)。特に「ムスリムはアヨーディヤー問題について厳格な沈黙を守るべき (Muslims should preserve a strict silence on the issue of Ayodhya)」 (*AR* 1993 January/February: 7) とまで述べており、マイノリティとしてインド社会で生存するためにムスリムが自制し耐える必要性を強調している。

(4) グジャラート事件 (2002 年) への応答

2002 年 2 月 27 日、グジャラート州アーメダバードのゴードラー駅付近で急行列車が炎上しヒンドゥー教徒の乗客 59 人が死亡した。ムスリムによる犯行と考えたヒンドゥー・ナショナリストがムスリム地区を襲撃し、その後、州内でムスリム住民へのヒンドゥー教徒による攻撃が約 3 か月にわたり継続した。死者数は 2000 人以上ともされ、その多くはムスリムだという報告もある (岡山 2017: 28)。

この事件に対して *AR* の 2002 年 5/6 月号は特定の固有名をあげることせずに従来言説を示している。前掲した「イスラームにおいて平和こそが規範 (peace in Islam is the rule)」 (*AR* 2002 May/June: 2-3) はここで述べられており、「クルアーンは書物である。銃や剣ではない (The Quran is a book. It is not a gun or a sword)」

(*AR* 2002 May/June: 2) としてイスラームの本質が非暴力であることを説く。

さらに敵 (enemy) と侵略者 (aggressor) を区別し、敵とは和解することを主張する。

クルアーンをしっかりと読めば「敵」と「侵略者」とを区別していることが分かる。私たちは、敵に対して憎しみを育てるのではなく、むしろ善い行いと賢明な戦略の助けによって、敵を友に変えるよう努めるよう命じられている (*AR* 2002 May/June: 6) 。

ここではアヨーディヤー事件の時と同様に、ムスリムを攻撃する者たちにただ反撃するだけではない反応の方策が示されている。

このように *AR* の非反応の言説は、短句を反復することで読者の記憶に落とし込み、甚大な暴力的被害を受けた事件が発生した時にもこれが繰り返され、ハーンの思想の支持者の行動に影響を与えたと考えられる。

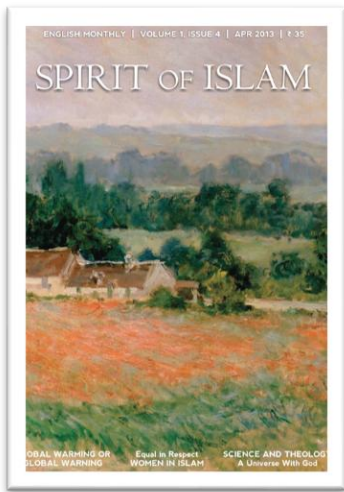
第2章 *Spirit of Islam* 創刊期 (2013–2021 年)

(1) 編集方針の転換と新しい読者像

2013 年に *AR* の後継として *SoI* が創刊された。*AR* の編集の特徴であった一般読者向けの読みやすさは継承されている。創刊号での主な論考のタイトルを見ると「すべての宗教に敬意を払う」「苦難を乗り越えて星へ」「宗教における対話」「イスラームは暴力を許すのか?」といったものがみられる。インド社会におけるムスリムの立場の困難さをふまえたうえで、共存を模索する意図を反映したものである。またハーンに質問する巻末のコーナーでは、「儀礼の重要性とは?」「恐怖や疑いといったネガティブな感情をなくせますか?」といったムスリムの日常的な問いにハーンが分かりやすく答えている。

この創刊号では「一に従い、全てに敬意を (Follow one, respect all)」(*SoI* 2013 January: 12, 21) という格言が強調されている。これは唯一神アッラーへの忠誠というムスリムの立場に立ちながらも非ムスリムとの共存を短い言葉で定式化したものである。インドという多宗教社会における衝突回避は、*SoI* が継続する最重要テーマであることが明らかである。

他方 *AR* との編集上の相違点として分かりやすい点が表紙のイラストである。*AR* は一貫して、平和の象徴であろう鳩が飛んでいる表紙であったが、創刊後の *SoI* ではモネやゴッホなどの西洋の画家が描く美しい自然の絵画が毎号選ばれるようになった。



機関紙 *Spirit of Islam* 表紙
(2013 年 4 月号)

例えばこの図 (*SoI* 2013 April) はモネが田園風景を描いた「ジヴェルニーの積みわら」の一部である。

筆者が編集スタッフにインタビューした際にこの変化について質問すると、次のような答えであった。まずニューデリーでの CPS スタッフに質問すると、自然を描いて平和をイメージさせているのではないと思うが、ただバンガロールのスタッフが担当なのでそちらの方が詳しいとのことであった (2024 年 8 月 6 日、ニューデリーの CPS センターにて)。そこでバンガロールの編集担当者に質問してみたところ、天国に行くというモチベーションをかりたてるイメージを選んでい、なぜならば天国こそが精神的平和の究極のイメージだから、という回答であった。(2024 年 8

月 16 日、バンガロールにて)

SoI の表紙は時期によって変化し、西洋絵画の後、地球をイメージしたモダンなデザインの時期や自然の写真が使われる時期もある。これは CPS の言説をより国際的に受け入れられやすくする意図の反映であると考えられる。

(2) 平和主義の絶対化

SoI のメッセージにおいては、平和こそが「最高善 (summum bonum)」であることが明確化される。「平和こそが最高善である“Peace is the summum bonum.” (*SoI* 2014 May: 8-9)」と述べられ、クルアーンの“Peace is the greater good” (クルアーン 4 章 128 節) が典拠として引用される (*SoI* 2014 May: 9)。

平和が最上位善であるという言説の背後にあるのは、正義よりも平和が共存のために必要だという優先順位の発想であろう。インド社会において暴力的迫害を受けていると考える多くのムスリムが、義を重視するならば暴力の応酬に向かう可能性が高い。しかし正義よりも平和 (ここでは忍耐という意味が強い) を重視して非反応を貫くならば、*AR* でも説かれた暴力の連鎖が断ち切られるという現実的戦略に向かうことができる。このように *SoI* の「平和＝最高善」という主張は、*AR* 期の原理である「平和こそが規範 (Peace is the rule)」をラテン語の「最高善 (summum bonum)」という用語を用いながら、より普遍的な発信力をもつ命題に言い換えられたものである。

このように、*SoI* 創刊期においては、*AR* 期の言説を国際化・普遍化することが目指されたと言える。

第3章 ハーン逝去後の *Spirit of Islam* (2021–)

(1) 新編集体制

ハーンが亡くなった後、娘のファリダ・ハナム (Farida Khanam, 1952 年生) が編集長となって *SoI* を継承した。ハナムはジャミア・ミリア・イスラミヤ大学のイスラーム学の元教授で、著者・編集者・翻訳者・講演者としてハーンの英語圏発信を担ってきた。ハーンの生前からハナムが CPS の活動を大きく支えてきたためであろう、逝去後も大きく *SoI* の編集が変化することはなかった。そのため一見したところ、ハーンの逝去が *SoI* に影響を与えたようには見えない。

筆者がインタビューで尋ねたところ、ハナム自身は月に 2–3 本の記事を書き、編集の最終チェックを行い、実際の編集は CPS の中核メンバーによる分業体制が確立しているとのことであった (2024 年 8 月 9 日、ニューデリーの CPS センターにて)。分業体制は主として、編集レイアウト担当、技術担当、ハーンの言説の記録保管担当、ハーンの言説の校正担当などに分かれているという (2024 年 8 月 16 日、バンガロールにて)。

(2) ハーンのメッセージの反復・継続

このように順調に *SoI* の編集が継続されたように見えるが、ハナムをはじめとするスタッフのインタビューからは創設者を喪ったショックと移行期の工夫・苦慮がうかがえた。実際、毎月の刊行は難しくなったため隔月にしたという (2024 年 8 月 9 日、ニューデリーの CPS センターにて)。ハーンの新しいメッセージが途絶えてしまったため、やむをえない判断であろう。この点について質問してみたところ、ハーンの生前の言説のなかでこれまで公開されていないものがまだ多くあり、それを *SoI* で伝えていくことが今後も続くという。前述したようにハーンの言説の記録保管担当や校正担当がいて、これは創設者の喪失を乗り越えるために効果的な手法であると言えるだろう。

例えば過激派による暴力を批判するハーンの言説のなかで、「一に従い、全てに敬意を (Follow one, respect all)」の言葉が繰り返されている (*SoI* 2021 May/June: 18)。さらに「非反応」のメッセージも継続的に反復されている。例えば、「沈黙を守る者は己を救う (Anyone who observed silence saved himself)」(*SoI* 2021 May/June: 26) というハディースを引用している。さらに「怒っている時は沈黙を保ち、事に戻る前に自らを鎮めよ (When we are angry, we should remain quiet, and try to calm ourselves before returning to dealing with the issue)」(*SoI* 2021 May/June: 31)、「怒りのまま逆境に立ち向かうのは賢明ではない (It would not be wise to confront any adverse situation in anger)」(*SoI* 2021 May/June: 31) という

言葉も語られている。「非反応」の精神状態を作り出すために「沈黙」という具体的な方策が明示され、苦境にある読者のために共存の智慧を与えている。

このようにハーン逝去後の *SoI* は編集方針を継続しつつ強化することで、反応の非暴力化を生活規範として維持・拡張することを目指している。

（３）平和主義のさらなる強化

SoI のメッセージはこれまでの平和主義をさらに強化・明確化する方向に進んでいる。

正義と平和を結びつけた人々とは異なり、マウラーナー（筆者注：ハーンの敬称）は、平和そのものが最大の恩恵（最高善, *Summum Bonum*）だと強調しました。平和がなければ、正義も教育も発展も存在することはあり得ません。彼の原則は「平和のための平和（Peace for the sake of Peace）」であり、正義のための平和でも、他の条件のための平和でもありませんでした（*SoI* 2025 September/October: 45）。

このように平和を最高善とする格言をふまえた上で、それを「平和のための平和（Peace for the sake of Peace）」と言い換え、平和にはそれ自体に価値があるとして、それ以外の価値観より超越した優位性をもつことを再定式化していると言えるだろう。

結論

本稿では *Al-Risala* 創刊から *Spirit of Islam* 創設期、そしてハーン逝去後の *Spirit of Islam* という三期を比較しつつ概観した。ハーンが提示してきた非反応（非対抗）の思想が誌面上で格言という形式に落とし込まれ、反復して記憶に定着させる編集となっている。この定期刊行物を読むことで読者の行動は、平和共存が最重要であり、そのために自身のメンタルをコントロールすることが必要だと学び、この行動に向かっていく仕組みになっていると考えられる。

紛争においては、特に被害の非対称性が大きい場合、暴力の応報はマイノリティ側にとって不利になる。CPS の言説は、インドでマイノリティであるムスリムのとる共存戦略として、暴力には反応せず、怒りを抑えて和解に向かうことが長期的には被害を減らすはずだという平和的展望に立っている。

ただこの平和主義は高度な忍耐力を必要とするものであり、限界もあると考えられる。個人レベルで言えば、どれほどの人たちがこの思想を受け入れることができるのかという疑問がある。またマイノリティが居住する国の制度に明白な不正義があった

場合、それを是正せずに甘受して個人の道德倫理レベルで耐え続けることの是非も議論されるべきであろう。

しかしマイノリティとして苛酷な環境で自らの共同体を守り生存するための戦略として、一定以上の効果があることは想像に難くない。実際にハーンは 2000 年にパドマ・ブーシャン勲章を政府から授与され、また 2021 年の逝去後、モディ首相はその生涯を称え死を惜しむ言葉をツイッター（現 X）で表明した（Business Standard 2021）。このようなインド社会からの評価はマイノリティとして生きるしかないムスリムにとって重要な防御壁として機能するものであろう。

参考文献

【一次文献】

- ・ *Al-Risala* (英語版, *AR*) : 1984 February - 2001 November/December; 2021, August-September, Special Edition
- ・ *Spirit of Islam (SoI)* : 2013 January - 2025 July/August
- ・ CPS 公式ウェブサイト : <https://www.cpsglobal.org>
- ・ CPS スタッフへのインタビュー :
ニューデリー 2024 年 8 月 9 日
バンガロール 2024 年 8 月 16 日

【二次文献】

- ・ Okawa, Reiko (2019) “Interpretation of the Qur’an in Contemporary India: Wahiduddin Khan’s Reading of Peace and Spirituality in the Scripture,” *International Journal of Islamic Thought* 16: 108–121 (110–118)。日本語訳 : 大川玲子 (2021) 『リベラルなイスラーム—自分らしく生きる宗教講義』慶應義塾大学出版会 (第 3 章)。
- ・ Omar, Irfan A. (2006) “Islamic Thought in Contemporary India: The Impact of Mawlana Wahiduddin Khan’s Al-Risala Movement,” in *The Blackwell Companion to Contemporary Islamic Thought*, 76–78.
- ・ Omar, Irfan A. (2008a) “Towards an Islamic Theology of Nonviolence (Part I),” *Vidyajyoti* 72(9): 671–680.
- ・ Omar, Irfan A. (2008b) “Towards an Islamic Theology of Nonviolence (Part II),” *Vidyajyoti* 72(10): 751–758.
- ・ Sikand, Yoginder (2004) *Muslim in India since 1947: Islamic Perspectives on Inter-Faith Relations*, London & New York: RoutledgeCurzon.

- Troll, Christian W (2002) “A Significant Voice of Contemporary Islam in India: Maulana Wahiduddin Khan” in *Studies in Arabic and Islam. Proceedings of the 19th Congress, Union Européenne des Arabisants et Islamisants, Halle 1998* (Leuven: Peeters): 531-541.
- Woerner-Powell, Tom (2025) *Pacifism and Nonviolence in Contemporary Islamic Philosophy: Mapping the Paths of Peace*, Cambridge University Press.
- 岡山誠子(2017)「インド・グジャラート州における反ムスリム『暴動』をめぐって：『暴動』生産の政治と市民社会」『アジア研究』 63/1: 27-45。
- 木村真希子（2008）「『暴動』をいかにとらえるか—南アジアにおける集合的暴力論の理論的展開—」 *PRIME* 27: 109–120。
- 近藤則夫（2015）『現代インド政治—多様性の中の民主』名古屋大学出版会。
- 近藤光博（2006）「グジャラート州—ヒンドゥー・ナショナリスト運動の岐路—」 広瀬崇子・南埜猛・井上恭子編『インド民主主義の変容』明石書店：289-296。
- 中溝和弥（2012）『インド 暴力と民主主義 —一党優位支配の崩壊とアイデンティティの政治—』東京大学出版会。
- 油井清光（2019）『現代インドの暴力予防』有斐閣。

【インターネット資料】

- Business Standard (2021) “Maulana Wahiduddin will be remembered for his knowledge on spirituality: PM” First Published: Apr 22 2021 (2025/10/01 アクセス) .

※本研究は「公益財団法人 JFE21 世紀財団」の研究助成による。